

LECTURE

講演会報告

大学

今回の講演会は、全国巡回パネル展「ウィリアム・バトラー・イエイツーその生涯と業績」の関連行事として、アイルランド文学研究者の大野光子先生をお招きしました。このパネル展は、アイルランドを代表するノーベル賞作家 W.B.イエイツーを紹介するもので、10月中旬より星が丘キャンパスにて開催され、会期中は200人を越す方々にご来場いただきました。

その会期半ばの27日、長久手キャンパスのミニシアターには英文学科生をはじめ100人近くが集まりました。大野先生はまずアイルランドの歴史を紀元前のケルトの先史時代から、20世紀に共和国として英国の支配から独立するまで丁寧にたどられました。そして自由へと向かう激動のアイルランドを象徴するイエイツーの詩を、彼自身の肉声による朗読CDや映像を交えて解説してくださいました。最後に先生は、経済危機を迎える現在のアイルランドがイエイツー作品をはじめとする自国の文化をあらためて大切に、今回のパネル展のように積極的に海外へと発信する姿勢の重要性を強調されました。



- 第4回文学部(英文学科)講演会「文化資産としてのイエイツーとアイルランド」
- 本学名誉教授 大野光子氏
- 10/27 長久手キャンパス



広嶋先生は、日本近世文学の特に井原西鶴をご専門とされ、『西鶴探究 町人物の世界』や『西鶴新解 色恋と武道の世界』(ともに、ベリかん社)などの著書があります。

今回の講演では、井原西鶴の作品にあらわれる「男色」がテーマとなりました。西鶴の作品は、高校の古典教科書ではほとんど取り上げられることがありません。彼の作品にしばしば描かれる、性的要素がその大きな原因だと考えられますが、そのなかでも男性同士の愛である「男色」は、特殊なものとして避けられがちです。しかしこの「男色」は、江戸時代においては、武家を中心に立派な文化として成立していたのだと思います。近世期の文化が、現代の感覚だけではとらえきれない、独自の深さを持つものであったことを、お話しいただきました。

参加者は、1、2年生を中心に、120人ほどでした。興味深い題材を扱ったお話し、学生たちも真剣に耳を傾け、大変熱気のある講演会となりました。



- 文学部国文学科企画・国文学会運営第5回文学部講演会「井原西鶴の可能性—少年愛という視点—」
- 神奈川大学経営学部教授 広嶋進氏
- 10/27 長久手キャンパス



講師にお迎えした池上先生には、来年度からスポーツ・健康医科学科3年次の授業「バイオメカニクス」研究プロジェクト講義「バイオメカニクス」を担当していただきます。そのため講演会にはゼミ選択を控えた2年生を中心に多くの学生が参加しました。

講演では池上先生がバイオメカニクスについて図や写真などを用いてわかりやすく解説していただきました。「スポーツの指導者をめざす皆さんは、スポーツにおける身体の動きだけでなく、日常生活の中の身体の動きについても常に興味を持ち、その動きを正確に知り、動きの原因を探って、なぜその動きができるのか、またはなぜその動きができないのか、自分の言葉で説明できるようにすることが大切です。今後、「動き」を調べる学問であるバイオメカニクスを追究し、ぜひ将来に役立ててください。」と池上先生は学生たちに熱いエールを送ってくださいました。



- 健康医療科学部 スポーツ・健康医科学科学術講演会「バイオメカニクス入門」
- 名古屋大学総合保健体育科学センター長 池上康男氏
- 11/14 長久手キャンパス



慶長13年、東海道筋にある有松の町で誕生した「有松絞り」には400年以上の歴史があります。すべて手作業で行われる有松絞りの技法は100種類を超え、その優れた技は近年、海外のファッション業界でも広く認められています。この講演会では、地元名古屋が世界に誇る有松絞りについて、開祖である竹田庄九郎から数えて8代目となる竹田嘉兵衛氏に語っていただきました。

会場には、美しい絞りの着物や、現代の繊維技術により立体的な絞り(形状記憶加工)が施されたTシャツ(POCKETE)・小物が華やかに並びました。竹田氏はインドやエジプトで古代から行われている絞りの歴史を説明された後、現在では有松絞りが世界的に高い評価を得ていることについて、映像を交えて紹介くださいました。「国際祭り会議」などで国際交流の架け橋ともなっている有松絞りについて知る今回の講演は、英語を通じて世界に目を向ける英文学科生が、日本の伝統文化の素晴らしさをあらためて実感する良い機会となりました。



- 第6回文学部(英文学科)講演会「世界の中の日本伝統文化 有松絞り」
- (株)竹田嘉兵衛商店取締役社長 竹田嘉兵衛氏
- 11/17 長久手キャンパス



LECTURE

講演会報告

大学



バンド活動に熱中していた学生時代、「シンセサイザでいい音色をつくるには？」という疑問を抱き、研究者の道へ進んだ山田真司先生。現在は、音楽心理学や音楽音響学などを専門とし、大学での教育・研究、企業との共同研究に力を注いでいらっしゃいます。そこで講演では、「自身の研究に関する話を中心に、デモンストレーションを交えて語ってくださいました。」

講演の中で山田教授は、音色の研究や魅力的なバイクのエンジン音の開発、ゲーム音楽とゲーム成績の関係の研究などについて、研究に使用した映像や山田先生のゼミ生が制作したプロモーションビデオなどをスクリーンに映し出して解説してくださいました。最後に山田先生は「ぜひ皆さんも、興味があること、好きなことを科学的に明らかにしていく、途な姿勢で、真剣に授業や研究に打ち込んでください」と学生たちに熱く語りかけました。約90分の講演に目を輝かせて聞き入っていた学生たちは、興味を追求することが社会を動かす研究にもつながると実感し、学びへの意欲をさらに高めたことでしょう。

- 第2回人間情報学部講演会・第7回文学部(図書館情報学科)講演会「イメージの測定とコンテンツ・デザインの科学的な方法—音色、音楽、TVゲームの印象とその設計—」
- 金沢工業大学情報学部教授 山田真司氏
- 11/18 長久手キャンパス



- ジェンダー・女性学研究所主催「ジェンダーの視点でみる韓国ドラマ」
- 立命館大学非常勤講師 山下英愛氏
- 11/24 長久手キャンパス



従軍慰安婦問題の著書出版されている山下英愛先生は、韓国ドラマの専門家としても活躍され、そのドラマ講座は女性の人気を集めています。ジェンダー・女性学研究所第25回定例セミナーでは、韓国ドラマが日韓それぞれの中高年女性にどのような受け入れられているかについてお話くださいました。さらに、「冬のソナタ」などを例に挙げ、日韓で異なる文化や規範の解釈が、字幕翻訳の過程で抜け落ちたり付け加えられたりする事例に言及しました。根強い家長的家族規範が恋愛の足かせとなる韓国ドラマ特有のストーリー展開が、日本語字幕になるとぼかされてしまうことや、近年の傾向として「女らしさ」の規範にとらわれることなく自由になるヒロインが登場してきたことも解説してくださいました。

講演の最後に山下先生は、「ジェンダー視点でドラマを批評することが、日韓相互文化理解のために意義があり、そのためには、ドラマを批評できる力・知識(ドラマリテラシー)を身につけることが必要」と、参加した一人ひとりに力強く語りかけました。



- ビジネス学部講演会「創るたのしみ 識るよろこび」
- 歴史小説家 鳴海風氏
- 11/29 星が丘キャンパス



和算を題材にした歴史小説を数多く執筆、出版している歴史小説家の鳴海風氏(本名:原嶋茂氏)。株式会社デンソーで生産システム開発に従事しているエンジニアでもあります。執筆活動も仕事も続けながら、53歳で大学院の博士課程に入学。博士号の学位を取得した後も学ぶ意欲は尽きず、さらに経営を学びたいと思い立ち、現在も大学院(ビジネススクール)に通っていらっしゃいます。

ビジネス学部の学生たちに向けた今回の講演会では、「私の履歴書」をテーマに、こうした経歴、目標や夢を実現していく強い思いなどについて語ってくださいました。少年時代の夢を大事に育て続けたら、エンジニアにも小説家にもなることができました。まるで違う職業のように見えるかもしれませんが、「創るたのしみ、識るよろこび」は共通しています。皆さんも、すぐに実現できなくても、一生をかけて夢を追いかけましょう！」という鳴海氏のまっすぐな言葉の数々は、学生だけでなく教員にとっても自分の人生とより真剣に向き合うパワーとなりました。



- 多元文化学会講演会「異文化—ろう文化と聴文化—」
- 関西学院大学非常勤講師 前川和美氏
- 12/12 星が丘キャンパス



前川和美先生は、3代目デフファミリー(全員がろう者である家族)育ちのネイティブ・サイナー(手話を第一言語とするろう者)です。講演会では、日本における「目の文化」に相對する「ろう文化」について手話で伝えてくださいました。

「アイデンティティをどう表現するか」に関して、前川先生はその大切さをイキイキと説明してくださいました。話の中で「聴覚障がい者」と「ろう者」という呼び名を比較し、両者の印象を解説。医学的・福祉的な視点から見た「聴覚障がい者」は「かわいそう」という印象を持たれがちで、一方、文化的な視点から見た「ろう者」は「コミュニケーション」としてポジティブな印象を持たれることが多いそうです。つまり、言葉の表現の違いひとつで、アイデンティティまでもが変化するので、こうした実例を交えた講演を通じ、学生たちは「ろう文化」の豊かさについて認識を深めていました。



LECTURE

講演会報告

大 学 / 大学院

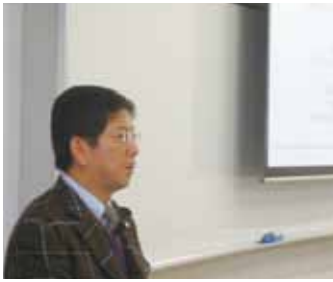
- メディアプロデュース学部講演会「指定管理者としての美術館運営～島根モデル、スタートから7年～」
- 島根県立美術館支配人 岩井裕一氏
- 12/20 長久手キャンパス



公の施設の管理・運営を、民間企業やNPOなどの法人・団体に担ってもらう指定管理者制度が始まったのは2003年のことです。7年前には、文化施設である美術館にも指定管理者制度が導入されました。全国でこの最初のケースとなったのが、島根県立美術館です。そして指定管理者として運営を委任されたのが、サントリ美術館やホールなどを通じて長年文化活動を続けているサントリホールディングスの子会社SPS(サントリパブリシティサービス)です。この新しいミュージアム運営の実際を、岩井裕一氏にお話いただきました。

SPSは現在、4つの美術館をはじめホールなど、全国で16の施設の指定管理者となつています。民間企業ならではの視点やノウハウ、施設間の連携を取り入れることで、美術館運営という難しい事業に取り組んでいます。

お話は、指定管理者の役割についての概要説明のあと、島根県立美術館での課題とそれを踏まえての新しい取り組みについての紹介がありました。美術館のサービスをいかにニーズに応えたいのとし、地域に



親しまれることで入館者の増加につなげていくのかについて、指定管理者としての活動のようすがよくわかる内容で、学生たちにも大いに刺激になりました。

- 現代社会研究科主催講演会「戦後日本人の中国像の変遷」「現代中国見聞断片」
- 岩波書店編集局副部長 馬場公彦氏
- 早稲田大学政治経済学術院教授 堀真清氏
- 12/23 星が丘キャンパス



堀真清氏

馬場公彦氏

前半は馬場氏が自著『戦後日本人の中国像』執筆の成果を踏まえて講演し、後半は日本ファンダム研究の第一人者である堀氏が講演しました。来場者55人のうち約半数が学外の方で、皆さん、両氏のお話に興味に耳を傾けていました。

馬場氏は、終戦から1970年代の日本人の中国観の変化を「革命中国から富強中国」「内なる中国から外なる中国」と説明。後者は知識人を中心とした人々の、自己の内面の投影としての中国から、現実主義的な観察の対象としての中国へという中国観の変化のことだそう。また1950年代～1960年代にかけて日本人はチベット、ウイグルなど少数民族問題や台湾問題を包摂して中国を見るという視点が欠如していたと指摘しました。

堀氏は、北京大学や人民大学、清華大学など中国の大学での講演や学術会議の体験談を交えて現代中国について紹介。「今後、多数の中国人が自国における民主主義について真剣に考え始めるとき、近代現代日本の政治的、思想的経験や戦後の韓国の経験が広く中国の人々に役立つかであろう。そのことを考慮しつつ今後も研究を続けたい」と熱く語りました。



講演会報告

中学校・高等学校

- 高等学校・中学校PTA講演会「逆転の発想 失敗から学ぶ・行うことから学ぶ」
- (株)アステックホールディングス会長 加納康昭氏
- 11/15 センテナリーホール



加納康昭氏は株式会社アステックホールディングス会長兼社長、グループ会社12社の会長であると同時に、日本ボーイスカウト愛知連盟理事としても活躍なさっています。講演会は、170人以上の保護者の方々にご参加いただき、盛大に開催できました。

加納氏は「逆転の発想 失敗から学ぶ・行うことから学ぶ」という演題のもと、まずは現在に至るまでに経験された仕事について話してくださいました。たとえば、発泡スチロールを扱っていた仕事では、火災対策について真剣に考えたからこそ、「非常口の表示は床面すれすれでない」と煙が充満した際に見えなくなる」ということを発見したそうです。また、セールズで顧客の心をつかむ方法は、ユニークで笑いを誘うものでした。

「外的環境に対して、徹底的に調べ、考えることで、どんな困難でも克服できる」「全力でぶつかって乗り越えられない問題は、誰がやっても乗り越えられないのだから、考える必要などない」という徹底的な合理主義は、「逆転の」という演題はついていますが、社会を貫くまっとうな原理だということに気付かされました。講演会後の懇談会では、もう一つの本業であるボーイスカウトの話で盛り上がりました。準備の段階からお手伝いいただいた役員の皆様にお礼を申し上げます。

